

# Citizenship for Children

2019 in 水戸

## 成果報告書



## 成果報告レポート目次

|                                   |           |
|-----------------------------------|-----------|
| <b>1. はじめに</b>                    | <b>3</b>  |
| 1.1. 本レポートの趣旨                     | 3         |
| 1.2. CforCプログラムについて               | 3         |
| 1.2.1. プログラムの背景                   | 3         |
| 1.2.2. Citizenship for Childrenとは | 4         |
| 1.2.3. 代表の想い                      | 4         |
| <b>2. 調査概要</b>                    | <b>6</b>  |
| 2.1. 調査対象のプログラム                   | 6         |
| 2.1.1. 実施場所と期間                    | 6         |
| 2.1.2. 実行メンバーと参加者                 | 6         |
| 2.1.3. プログラム内容の概要                 | 6         |
| 2.2. 調査概要                         | 13        |
| 2.2.1. 調査の目的                      | 13        |
| 2.2.2. 評価手法                       | 13        |
| 2.2.3. アンケート（事前・事後・3ヶ月後）          | 14        |
| 2.2.4. インタビュー                     | 15        |
| <b>3. 成果報告</b>                    | <b>16</b> |
| 3.1. プログラム評価                      | 16        |
| 3.2. 自己と周囲へのインパクト評価               | 21        |
| 3.2.1. 自身の行動と意識の変容                | 21        |
| 3.2.2. 新たに始めた取り組みと行動              | 24        |
| 3.3. まとめ                          | 26        |

# 1. はじめに

## 1.1. 本レポートの趣旨

このレポートは、「優しい間」を紡ぐ市民を育成するために茨城県水戸市を舞台に行われたプログラム「Citizenship for Children」の成果を報告する文書である。プログラムを通じて参加者の意識や行動に起きた変化、および参加者の周囲の人やコミュニティに与えた影響が何であるかを分析し、本プログラムがもたらした社会的なインパクトを評価することを目的とする。

## 1.2. CforCプログラムについて

### 1.2.1. プログラムの背景

地域社会を取り巻く現状として、近年、子どもの虐待や貧困、いじめなどの問題が顕在化する中で、子どもや家族の「心の孤立」をいかに防ぐかが、重要な課題となっている。ここでいう「心の孤立」とは、生きづらさや困難を抱えていても、大人や社会に助けを求めることができない、頼れない状態のことである。

その背景として、いわゆる支援機関や学校など、子どもをサポートする主な担い手の逼迫化がある。例えば都内の児童相談所では、一人のワーカーが100人以上の子どもを担当している状況が生じていたり、不登校や発達障害、養育の難しい家庭が利用する児童精神科の病院では初診までに3か月～6か月を要するという状況も常態化しているのが現状である。

それに対して、地域の中では、「子どもたちのために何かしたい」と市民や民間主導の動きが生まれ、子ども食堂や学習支援の設置などが進んでいる。その想いや動き自体は貴重なキャパシティ（可能性）であるが、子どもたちの日常の中における関わりをどう作るのか、一人一人の小さな声に誰がどう耳を傾けるのか、といった点についてはまだまだ課題が多く残されている。

子どもの育ちにとって大切な、信頼できる他者の存在。たとえ心に小さなケガをしたとしても、その傷口が広がる前に癒し合える仲間が存在。そんな存在が地域や社会の中に生まれ続けていくための仕組みや文化を築いていくことが必要ではないか。そのような社会背景や課題意識を受けて、PIECESでは、2016年5月、本プログラムの前身である「コミュニティユースワーカー育成プログラム」を開始した。約3年間、4期にわたり東京都内でプログラムを実施したのち、2019

年より「Citizenship for Children」に名称を変更し、茨城県水戸地域でのプログラムが始まった。

## 1.2.2. Citizenship for Childrenとは

本プログラムでは、子どもと自分にとってのより良いアクションやあり方を探求する市民性の醸成を狙いとしている。本プログラムで行うのは、いわゆる支援職や専門職の養成ではない。一人の人であり市民である自分を客観視すること。子どものためだけでも自分のためだけでもない、その両者を大切にするとはどういうことかを問う視点をもった上で、具体的なアクションを起こすこと。そして、答えを求めるのではなく、学び続け、問い続ける姿勢を持つこと。そのような市民、また市民によるアクションが子どもの生活する日常の中に生まれ続けていくことを目指している。

プログラムは、①専門知識を学ぶ座学講座、②子どもと関わる現場実践、③リフレクションとコミュニケーションを扱うゼミ、という3つの取組から構成されている。この3つのプロセスを通じて、約6か月間、12名程度のチームで対話と内省を繰り返しながら「自分だからこぞできるアクション」を問うていき、プログラム終了後の主体的な社会への参画を促していく。一人では難しい継続的な活動も、同じ地域で活動するチームメンバーの存在やフォローアップの研修があることで、相互の支え合い学び合いが生まれ、継続性が担保される仕組みである。

これまで本プログラムを修了したメンバーの中からは、地域の住民と一緒に10代で妊娠・出産を経験したシングルマザーのサポートを行うプロジェクトをはじめ、市民性を発揮した大小さまざまなプロジェクトやアクションが立ち上がっている。

## 1.2.3. 代表の想い

「ねえ、僕のことなんて、もう忘れてるんじゃないかな」

自分の家族のことを振り返りながらある子がぼろっとつぶやいたことがありました。

自分の一番身近な大人に対して「自分のことを見ていてね」ではなく、「自分のことを忘れないでね」と願う彼はどんなことを体験し、そしてどんなことを感じ、思っているのだろうと、彼の隣にそっと座りました。

子どもたちの隣で、子どもたちの目に映っていたこれまでの景色を一緒に眺めていると、もしかしたら深まらなくて良い傷も、痛みもあったんじゃないかな、そんなふうに思うことがあります。

同時に、子どもたちの隣で、子どもたちから紡がれる風景を一緒に眺めていると、その内面にある多様さに、豊かさに、複雑さにハッとすることがあります。

違う物語を生きているように見える子どもたちも私も、あなたも、この世界の物語を育み彩る一人の人です。そして、その物語は影響しあって、重なり合っています。だから、私たちは、とりにいるあの子が痛むことは決して誰かのこととは思えないことがあるし、遠くにいるまだ見ぬあの子を愛おしく思い、その無事を自分のことのように願ったりします。自分とは違うけれど同じ世界に共に生きる子どもたち。そんな彼らの目に映る世界はどんな世界なのか、何を思い、何を感じ、何を願っているのか。

私たちは、そんな子どもたちの願いが、複雑さが大切にされる今を願って、子どもたちの周りに「優しい間」を育むCitizenship for Childrenを行っています。

プログラムに参加した一人一人が想像力を広げ、自分たちの暮らしの中で、子どもたちの願いと出会い、自分たちの願いを知り、隣の人の願いに目を向けて、遠くのあの人を愛おしく思いながら、子どもたちの周りに優しい間を紡ぎ出す。間が広がり、子どもたちが大人になり、また新しい間が生まれ、その間を知った子どもたちが大人になり、また新しい間が生まれ。

そうやって育まれていった300年後。たくさんの痛みを抱え、傷ついていた世界には、きっとたくさんの願いが生まれ、愛に溢れているんだと思います。そして、「私」のことだけを考えていた社会には、その時代に生きる子どもと、誰かと、一緒に地球に生きる生命への敬意を持ち共に生きる「私たち」の物語が生まれているのだとも思います。

そこには、「自分のことを忘れないでね」と願っていた男の子にあったかもしれない、誰かからの暖かい眼差しの中で、安心して未来に希望を持って生きている、そんなあなたとのつながりがあるのかもしれない。

未来から300年前の「今」

今から未来への物語を紡いでいく未来のかけらが、プログラムに参加した人たち一人一人の手から生まれ始めているのだろうと思います。

社会の綻びを生み出しているのが、この世界を育む一人ひとりだとしたら、そこに新たな物語の初動を生み出すのもまた私たち一人ひとりなんだろうと思います。

優しい間が広がる新たな未来を、このプログラムを通して、そしてこのプログラムに参加した方々と共に育んでいきたいなと願っています。

認定NPO法人 PIECES 代表 小澤いぶき

## 2. 調査概要

### 2.1. 調査対象のプログラム

#### 2.1.1. 実施場所と期間

**実施期間**：2019年5月—2019年12月

**実施場所**：茨城県水戸市内の公共施設

#### 2.1.2. 実行メンバーと参加者

##### ■参加者

参加者は、茨城県内の方が9名、県外が3名であった。年齢構成は20代が5名、30代が2名、40代が5名であり、学生から主婦・会社員・団体職員など多様な背景を持つ参加者が集った。

##### 【実施主体】

##### ■認定NPO法人PIECES

齋典道（プロジェクトリーダー）、青木翔子（メインファシリテーター）、小山めぐみ、若林碧子、和田麻友子

##### ■NPO法人セカンドリーグ茨城

横須賀聡子、山根真知子、奈良間英樹、鈴木真紀

#### 2.1.3. プログラム内容の概要

プログラムは全6回の集中講義と、そこで学んだ内容を実践する「現場実践」から構成される。参加者が一堂に会する集中講義では、午前中に講師による座学で理論や現場での活動事例を学び、午後は対話を重視したゼミ活動を行った。現場実践においては、各メンバーが選択した現場（例：学童、職場など）において学びを実践し、そこから気づいた新たなことを「プロセスレコード」として記録・振り返りを行った。

それら二つに加えて、第6回の直前に特別合宿、またプログラムの学びを総括する「最終振り返り会」をまとめとして実施した。また、各回の間にもオンラインコミュニケーションツール「Slack」を用いてこまめに連絡を取り合い、1対1のメンタリングなども実施した。以下にプログラムの実施概要をまとめる。

■第1回

日時：2019年7月28日（日）

場所：水戸生涯学習センター

講座テーマ：子どもの「強み」を捉え直す～関係づくりの難しい子どもへの関わり方～

講師：小澤いぶき（PIECES）

ゼミ：チームビルディングと目標づくり

ファシリテーター：斎・青木（PIECES）



第一回はプログラムのキックオフとして、チームビルディングと目標づくりを実施した。各自の目標や参加する動機を共有し、その後レゴブロックを用いてチームワークの大切さを体感できるゲームを行った。

■第2回

日時：2019年8月25日（日）

場所：水戸生涯学習センター

講座テーマ：子どもへの深い理解をもたらす「アセスメント」を学ぶ

講師：斎典道（PIECES）

ゼミ：市民性と「間」

ファシリテーター：斎・青木（PIECES）



8月25日 Day2 (ゼミ)



子どもの行動を深く理解するためのアセスメントという観点を午前中に学び、その後、目に見える子どもの様子から、その子の心情を考えるワークを実施した。その後、3,4人のグループに分かれ、それぞれの事例について考えたことを仮説として共有し、互いの考えを共有した。

■メンタリング：1on1



参加者と1対1の対話を実施し、プログラム参加を通じて達成したい個人の目標を定めた。

### ■第3回

日時：2019年9月29日（日）

場所：水戸生涯学習センター

講座テーマ：子ども期の“生きづらさ”に心を寄せる

講師：関貴教さん（児童養護施設職員／認定NPO法人いばらき子どもの虐待防止ネットワークあ  
い理事）、小野瀬直人さん（IT企業役員）、横須賀繭子さん（（み）当事者研究会主宰）

ゼミ：自身の価値観を深ぼる

ファシリテーター：斎・青木（PIECES）



「子ども期の生きづらさに心を寄せる」というテーマで午前中は3名から講演を頂き、「生きづらさ」の本質が狭いコミュニティや「〇〇すべき、〇〇が普通」という狭い固定観念にあることを確認した。午後は、自分の持っている価値観を理解したうえでそれとは違う価値観を受け入れることができるようになるためのワークを実施し、自らの願いや価値観に気づいてそれを置き去りにしないことの大切さを学んだ。

#### ■第4回

日時：2019年10月27日（日）

場所：茨城県立青少年会館

講座テーマ：地域での子ども若者支援のこれから～中間支援の立場から見る“非専門職”の可能性

講師：根本真紀さん（文京区社会福祉協議会）

ゼミ：地域の社会資源と市民性

ファシリテーター：斎・青木（PIECES）



専門職と非専門職の役割の違い、また一市民として関わるからこそその強みという主題で、文京区社会福祉協議会の根本真紀氏よりご講演をいただいた。午後はその学びをもとに、地域にある社会資源のマッピングをワークとして行い、自らが市民性を活かして地域で活動するイメージをつくった。

#### ■第5回

日時：2019年12月1日（日）

場所：茨城県立青少年会館

講座テーマ：子どもにとっての「遊び」を紐解く

講師：神林俊一さん（一般社団法人プレーワーカーズ）

ゼミ：子どもと自分の間を創造する

ファシリテーター：斎・青木（PIECES）



プレーパークの運営を通して子どもたちやその家族に寄り添い続けている神林俊一講師から、消費するのではなく、自分たちで作り出していくことが子どもにとっての遊びや居場所の意味であることを学んだ。午後は「支援者―被支援者」という枠組みから離れて創造的に解決策をデザインする「クリエイティブケースワークショップ」を実施し、子どもにとって本当に必要なものを創造的に考える体験を行った。

### ■特別合宿

日時：2019年12月21日（土）

場所：ラグナロック

テーマ：「私」から「私たち」へ

ファシリテーター：青木（PIECES）

子どもと向き合うことは、自分と向き合うことでもある。

合宿では、自分がこうした活動をするときに感じる心の動きについて全員で共有した。また、自分という枠を越えて世界視点で考えたり、現在の自分という固定概念からの開放を考えていくために、グループに分かれて「手放す」「宇宙とつながる」「imperfection is perfection」というテーマについて話し合いを行った。

## ■第6回

日時：2019年12月22日（日）

場所：水戸生涯学習センター

講座テーマ：子ども支援の原点を問い直す～子どもの声を大切にできる実践とは？～

講師：山下仁子さん（NPO法人ビーンズふくしま）

ゼミ：子どもにとって本当に大切なこととは

ファシリテーター：青木（PIECES）



第6回は原点に立ち戻り、山下仁子講師のご講演を通して「子どもの声を大切にできる実践とは？」という問いを改めて考えた。短期的な成長を一方向的に求めるのではなく「待つ」「信じる」ことの重要性、またその上で「市民として、そのままにいること」や「子どもと関わること」について対話を行った。

## ■最終振り返り会

日時：2020年1月26日

場所：マチノイズミ（茨城県水戸市）

テーマ：プログラムの振り返り

ファシリテーター：斎・青木（PIECES）

これまでの6ヶ月間を振り返ることを目的に開催した。「優しい間」について、応募した当時に考えていたこと、現在考えていること、そして未来にどうしていきたいか、ということを用意したワークシートを使ったワークを実施し、自分自身の変化を振り返っていった。

## ■現場実践

日時：2019年7月～2019年12月

**内容：**参加者がそれぞれ自分の関心ある実践現場へボランティアとして参加し、子どもとの関わりを実践した。

### ■現場実践の振り返り

**日時：**2019年7月～2019年12月

**内容：**参加者が、それぞれ実践の振り返りを、リフレクションシートに記入し、活用して行った。（内容については、個人情報などが含まれるので割愛。）

| 現場の様子                          |               |               |    |
|--------------------------------|---------------|---------------|----|
| 【記入者： 】                        |               |               |    |
| 日時： 月 日()                      |               |               |    |
| 現場の住所：                         |               |               |    |
| 登場する子ども：                       |               |               |    |
| 相手の言ったこと・行ったこと                 | 私が思ったこと・感じたこと | 私が言ったこと・行ったこと | 考察 |
|                                |               |               |    |
|                                |               |               |    |
|                                |               |               |    |
| 気づき                            |               |               |    |
| ※今回プロセスレコードを置いてみて、気づいたことや感じたこと |               |               |    |
|                                |               |               |    |

## 2.2. 調査概要

### 2.2.1. 調査の目的

本プログラムが参加者の意識と行動習慣、および周囲の人に与えた影響を分析し、社会的インパクトを把握することを目的とする。

### 2.2.2. 評価手法

本プログラムの社会的なインパクトを評価するために、大きく二つの手法を用いた。

一つ目は、参加者に対するアンケート調査である。アンケート調査はプログラム参加者に生じた意識・行動の変容を大きく把握し全体の傾向を明らかにすること、およびプログラムそのものに対する評価を目的として行った。それぞれの結果を分析することで短期的・中長期的な変化を追跡する。本レポートにおいてはプログラム終了直後に実施し、直接的および短期的に起きた変化を追跡した。

二つ目は、一部参加者に対するインタビュー調査である。この調査は、アンケートで明らかになった全体の傾向を受け、その傾向が見られるようになった背景や理由を深く理解することを目的として行う。その過程において、自身の意識・行動変容のみならず他者に与えた影響や、新しく始めた自身の行動やプロジェクトに関して明らかにすることをねらう。

### 2.2.3. アンケート（事前・事後・3ヶ月後）

アンケート調査は、「①参加者の意識・行動変容調査」と「②プログラム評価」の二つである。それぞれの実施概要を、以下に示す。

#### ①参加者の意識・行動変容調査

目的：プログラム参加者の意識と行動に起きた変化を把握すること

実施日時：2020年1月26日（日）

対象者：CforC水戸プログラム参加者

実施人数：10人

質問項目：

表1. アンケート質問項目（自己変容）

| 質問  | 回答方法                        |
|---|-----------------------------|
| プログラムを通して、ご自身の考え方にどのような変化がありましたか？（例：子どもを支援の対象としてではなく、対等な存在として見るようになった。）   | 自由回答                        |
| 以下の活動に関して、プログラム参加前後での活動頻度の変化をお答えください。<br>1. 自主的に子どもと遊び、触れ合うこと<br>2. 子どもと関わるボランティア活動<br>3. 友人・知人に向けた啓発活動<br>4. オンラインでの情報発信<br>5. 職場・個人でのプロジェクト立ち上げ | 5件式の選択回答<br>（大いに減った～とても増えた） |
| 新たに取り組むようになったことの具体的な中身を教えてください。   | 自由記述                        |
| 行動を始めた具体的なきっかけを教えてください。   | 自由記述                        |

#### ②プログラム評価

目的：本プログラムでの学びが現場での実践においてどのように、またどの程度役に立ったかを分析すること

実施日時：2020年1月26日（日）

対象者：CforC水戸プログラム参加者

実施人数：10人

質問項目：

表2. アンケート質問項目（プログラム評価）

| 質問  | 回答方法     |
|---|----------|
| 自分の成長やレベルアップという観点からみて、実践現場で活動を行っていく際に感じた難しさや課題、環境的な制約などはありましたか？   | 自由記述     |
| 公開講座やゼミは、現場での実践においてどのくらい役に立った／学べたと感じていますか？  | 5件法の選択回答 |
| リフレクションにおいて、自分自身で活動を文章化したり、他の人のリフレクション内容を聞いたり、それに対して質問を出したりする中で、自分の学びとして、何か気づいたことはありますか？あなたの考えや感じたことを自由に書き出してみましょう。 | 自由記述     |
| 公開講座について、良かった点と改善点について教えてください。  | 自由記述     |
| ゼミについて、良かった点と改善点について教えてください。  | 自由記述     |
| 参加者同士の関わり方や、他の参加者の関わり方について、良かった点と改善点を教えてください。   | 自由記述     |
| その他、ご感想などご自由にお書きください。   | 自由記述     |

## 2.2.4. インタビュー

アンケート調査で明らかになった全体の傾向を受け、個人のレベルで起きた変化を詳細に把握するため、以下の概要の通りインタビュー調査を行った。

**目的：**①プログラムを通じて起きた意識と行動の変容、②周囲の人間に与えた影響、③新たに始めた取り組み、の様子を個人レベルで詳細に明らかにすること

**実施期間：**2020年2月27日～3月18日

**対象者：**CforC水戸プログラム参加者

**実施人数：**6人

**実施形式：**オンラインでの半構造化インタビュー

**質問項目：**

- ①プログラムを通して起きた意識・行動の変容
- ②周囲の人やコミュニティへ与えた影響
- ③新たに始めた取り組み

## 3. 成果報告

### 3.1. プログラム評価

2.2.3-②で述べた通り、プログラムに対する評価を参加者の視点から実施した。本節において、このプログラムで学んだことが「現場での実践においてどの程度役に立ったか」という視点から分析すること、および公開講座とゼミの良かった点と改善点を整理することで評価をまとめる。

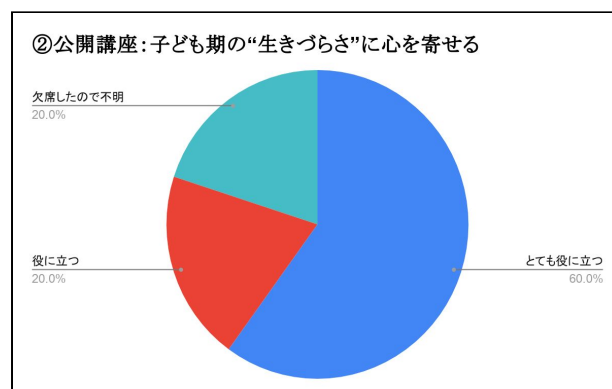
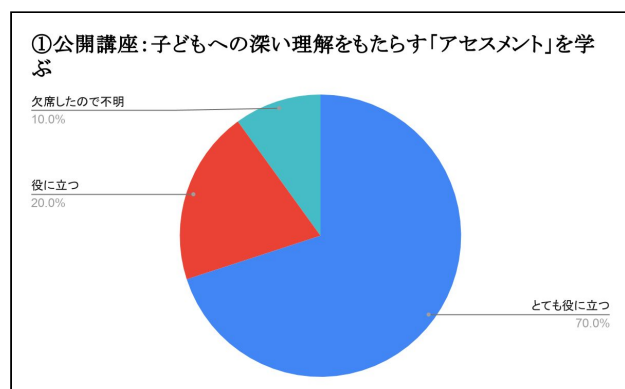
#### 問1. 公開講座やゼミでの学びが現場実践においてどの程度役に立ったか

以下それぞれのプログラム内容に対して、現場実践において役に立った度合いを選択して回答した。回答項目は「全く役に立たない」から「とても役に立つ」の5つに、「欠席したので分からない」を加えた6つである。

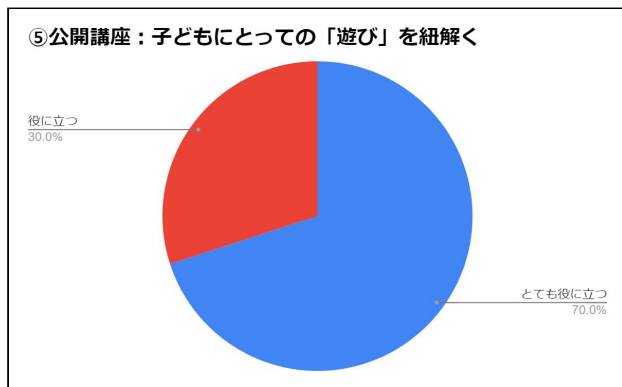
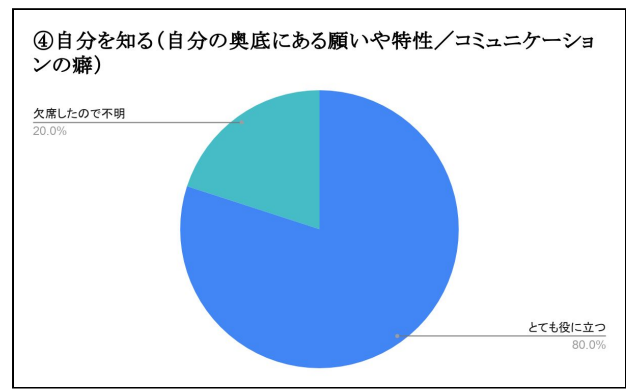
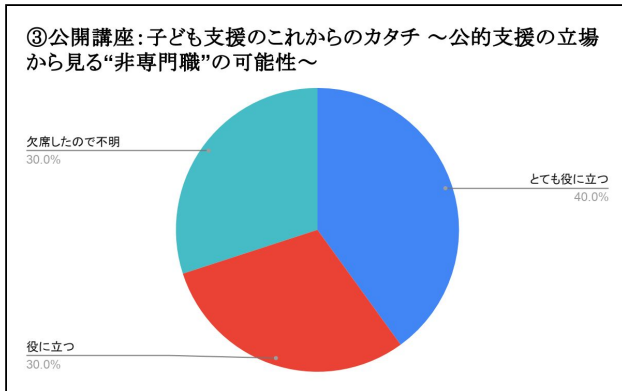
表3. 評価対象のプログラム内容一覧

| ID | プログラム内容  |
|----|--|
| ①  | 公開講座：子どもへの深い理解をもたらす「アセスメント」を学ぶ（講師：斎）               |
| ②  | 公開講座：子ども期の“生きづらさ”に心を寄せる（講師：関、小野瀬、横須賀）              |
| ③  | 公開講座：子ども支援のこれからのカタチ ～公的支援の立場から見る“非専門職”の可能性～（講師：根本） |
| ④  | 第5回：自分を知る（自分の奥底にある願いや特性／コミュニケーションの癖）               |
| ⑤  | 公開講座：子どもにとっての「遊び」を紐解く（講師：神林）                       |

図1. プログラム評価の結果一覧







**問2. リフレクションにおいて、自分自身で活動を文章化したり、他の人のリフレクション内容を聞いたり、それに対して質問を出したりする中で、何か気づいたことはありますか？**

| リフレクションによる気づき（抜粋）  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 複数人で行うことで、より広い考え方ができる、新しい視点に気づいた</li> <li>● 自分にとって何を「あたりまえ」に考えていたのか。自分一人では気づけない点に気づけたこと、一人だと「良くない点」ばかり見てネガティブになりがちなのが、みんなだと「良かった点」を楽しく考えることができました</li> <li>● 子どもと関わる上での価値観や視点の属人性</li> <li>● 自分の感情、心の動きを細やかに感じる事ができた</li> </ul> |

複数人でリフレクションをすることによる効果を指摘する声が上がった。他者と対話を行うことで、自分にはなかった視点に触れることができる。その結果、自分の価値観を客観視することができたり、ポジティブに捉えることなどが可能になったことがわかる。また、過ぎ去っていく経験を文章化することで、自分の気持ちや心について観察することができるようになっていた様子を伺うことができた。

**問3. 公開講座の良かった点と改善点**

以下に、公開講座の良かった点および改善点を示す。

| 良かった点   | 改善点 / 提案  |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 開催頻度</li> <li>● 神林講師の講座</li> <li>● 時間帯</li> <li>● ゲストの選出</li> <li>● 日曜日開催が良い</li> <li>● 全く接点のなかった人、課題の当事者、現場で取り組んでいる人の話を聞いたこと</li> <li>● いろいろなバックグラウンドを持つ人との交流</li> <li>● 小野瀬講師の講座</li> <li>● 現場で実践をしているゲストからきく具体例が興味深かった</li> <li>● 参加できなかった時も資料データをもらえたこと</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 会場が変わる、他のイベントと重なって移動が大変だったなど、日程の調整は必須</li> <li>● 公開講座+ゼミで丸一日頭を使う事の負荷</li> <li>● 過去のプログラム参加者の方との交流が欲しかった</li> <li>● 合宿を初期にやると、もっと早く深いつながりを持てた</li> <li>● 日本親子コーチング協会代表理事をゲストとして呼ぶのはどうか</li> <li>● 実践活動を他メンバーと一緒にやりたかった</li> </ul> |

公開講座の良かった点として、開催頻度や時間帯、またゲストを含めた他の参加者との交流を挙げる声が目立った。普段の職場や家庭、地域で会うことが難しい人との交流や、そうした多様性がもたらす気づきに価値を見出している参加者が多いことが見受けられる。特に、現場で実践活動を続けているゲストの話から多くの気づきを得たということを指摘する声があり、抽象論にとどまらない生の現場の声を聞くことで自らの実践活動へ適用するヒントを得る意義があったと推測できる。

逆に改善すべき点としては、他の参加者とのより早い段階からの深い交流を要望する声が上がった。本年度においてはプログラム後半に合宿を行いメンバー間の親睦を深めたが、より早い段階で行うべきであるという声も聞かれた。加えて、過去のプログラム参加者との交流を求める声があり、全体的な傾向として新たなつながりとその深さを求める声がニーズとしてあることが推測された。

#### 問4. ゼミの良かった点と改善点

| 良かった点（抜粋）  | 改善点 / 提案（抜粋）   |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自分や子どもとの出来事を向き合う時間を持つことができた</li> <li>● 他の参加者の考え方を知ることができた</li> <li>● 世界が広がったこと</li> <li>● 自己覚知のワークをすることで、自分自身の課題が明らかになった</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 月一以外で集まれる機会が欲しい</li> <li>● もう少し時間が欲しい。じっくりとテーマを掘り下げ、意見や考え方を交換する時間があると良かった</li> <li>● 各日の午前中にみんなで行って現場実践活動をして、午後にそのことを振り返るといった流れだとお互いのことをより深く</li> </ul> |

|   |          |
|---|----------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 何か困ったときに相談できる仲間が持てたこと</li> </ul> | 知れて良いのでは |
|---|----------|

ゼミを通じて、自分や子どもとの出来事に向き合う時間を持つことができたという声が寄せられた。加えて、他の参加者の考えを知ることによって自らの視野の広がりを感じられたという声、また自己覚知のワークなど具体的な取り組みの効果や指摘する意見が寄せられた。メンバーとの貴重な交流時間になっていた。その一方で、月に1回では少なく感じられたということ、また時間が足りないという課題も明らかになった。他の参加者との関係づくりとそこから得られる学びに対して価値を見出す意見がある中で、そうした学びを深めるための時間をもっと必要とする様子がうかがえた。

### 問5. プログラム参加者同士の関わり方や、他の参加者との関わり方について、良かった点と改善点

| 良かった点（抜粋）   | 改善点 / 提案（抜粋）  |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 合宿がとても良かった。何か特定の目的を持つのではなく、「ただ一緒に過ごす」時間が良かった</li> <li>● 共感されやすい価値観と異なる価値観をそれぞれが表出し、認め合うことができたこと</li> <li>● ゼミ後に行った喫茶店で話し合えたのが良かった。</li> <li>● 年齢や立場が異なっていて、多様な視点からの意見を聞くことができた点</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>● お菓子の持ち込みなど、参加者同士が打ち解ける仕掛けがもっとあると良い</li> <li>● 対話を通して答えを出していく時間があるとよい</li> <li>● ご飯会など互いにもっと関係を深めるための仕掛けがもっとあると良かった。講座+ゼミだけでは難しい</li> <li>● バディ制度など、もっと小さな単位でコミュニティ活動をして良かったかもしれない。</li> <li>● プロセスレコードを自分に対してもやりたかった</li> <li>● もっとプライベートなコミュニケーションがほしい</li> </ul> |

メンバー同士の交流という視点において、合宿が大きな役割を担っていたことがうかがえる。課題として、より多くのプログラム以外での関わりが期待されていることが明らかになった。多様な年代や立場のメンバーが集まる場であるからこそ、ゆとりのある時間が求められていると考えられる。

### 問6. 実践現場で活動を行っていく際に感じた難しさや課題、環境的な制約などはありましたか？

### 実践現場における難しさ（抜粋）

- 1人の子をしっかり見たくても、複数人いるため見られないことも多い
- 活動時間帯と自分の仕事や子育てが重なり、参加するのが難しかった
- 頻度が少ないため、深い関係性を築く、子どもの背景を知るといことはむずかしかった。
- 短期間（6ヶ月）であると、例えば家庭内暴力にあっているとといった専門的支援が必要な場を体験することができなかった。（市民として体験してみたかった）
- とても様々な場所や設定で現場体験ができた。今後も足を運びやすいような計らいをしてくださいました。
- 他のメンバーと活動できなかったことが少し残念であった

今回のプログラムでは、各メンバーの居住地が遠かったこともあり、それぞれ別の場所で現場活動を行うこととなった。そのため、複数のメンバーと一緒に活動することができない等の難しさがあった。また、半年間でなおかつ顔を合わせる頻度が少ないため、プログラムの実施期間中に子どもと深い関係を築くことに対する難しさも見受けられた。

### 【プログラム評価のまとめ】

プログラム評価の全体を見渡した時、いくつかの重要なキーワードが繰り返し浮かび上がってくる。一つ目は、「つながりの質と広がり」である。ゼミ、公開講座、現場実践いずれの評価においても、他の参加者や現場実践で出会った子どもたちとのより深い、密なコミュニケーションを求める声が多く寄せられた。それは、現場実践における「他のメンバーと活動できなかったことが少し残念であった」という声、またゼミ活動評価における「月一以外で集まれる機会が欲しい」といった声に表れているものと考えられる。問5において、プログラム後半に行われた合宿を高く評価する声が多く寄せられていたことから、後半になるにつれて参加者同士の相互理解が深まり、学び合う文化と環境が整備され、プログラム終了時におけるこれらの回答につながっていったと考えられる。本プログラムのねらいの一つにコミュニティ設計による継続性の担保が挙げられていることから、参加者同士の関係構築は重要な目的の一つであるといえる。このことから、プログラムは継続的で有機的な関係継続に向けた重要な布石を築いたと考えられる。一方で、より多くの交流機会を求める声や、交流の仕方（例：複数メンバーで現場実践を行う）に関する指摘も寄せられたため、改善の余地も大いにあるといえる。

二点目は、つながりの結果としての「視点の多様性の獲得」である。リフレクション評価において「複数人で行うことで、より広い考え方ができる、新しい視点に気づいた」という声が多く寄せられたこと、また公開講座においては「現場で実践をしているゲストからきく具体例が興味深かった」という声が上がったように、他の参加者や講師の視点から物事を見なおすことでインパクトのある気づきを得たことが伺える。なるべく多様な視点をもった講師の方を招いたこと、そして心理的な安全性を確保したうえで対話を促したプログラム設計の効果が表れた結果であると考えられ、翌年度以降も引き続き保つべき要素であるといえる。

## 3.2. 自己と周囲へのインパクト評価

本節では、2.2.4で概要を示したインタビュー調査を元に、次の三つの観点からプログラムの社会的インパクトを評価する。

一つ目は、「参加者の意識と行動の変容」である。本プログラムでの学びが参加者の考え方や価値観に与えた影響を抽出し、意識面での変化が行動の変化へと表れていった過程を明らかにする。二つ目は、「周囲の人やコミュニティへの影響」である。変容した行動や意識が、プログラムと直接関わりのない人やコミュニティにもたらした影響を詳細に明らかにする。三つ目は、「プログラムを通じて新たに始めた取り組み」である。プログラムでの気づきや他の参加者との交流をきっかけとして、どのような社会的事業が実際に生まれたのか、およびその過程を明らかにする。

なお、この評価はインタビューの発話内容を分析する形式で行った。インタビュー協力者の発話内容から調査観点到合致する言い回しを「発話内容のラベル」として一つ一つ名前を付けて抽出し、類似性の高いもの同士を「大カテゴリ」としてまとめて名前を付けた。さらにその大カテゴリを複数まとめてさらに抽象化し、「グループ」として名前をつけた。なお、それぞれの大カテゴリに属する発話を行った人数もカウントした。具体的な内容は、以下のとおりである。

### 3.2.1. 自身の行動と意識の変容

プログラムを通じた参加者の方々の意識・行動変容に関して、6名にインタビューを通じて自由に回答をしていただいた。その結果、変化は、大きく「自己意識にまつわる変化」「市民としての関わりにまつわる変化」「子どもや他者の言動に対する想像力や視点にまつわる変化」の3種類に分けられた。

| グループ        | 大カテゴリ              | 発話内容のラベル  | 人数 |
|-------------|--------------------|---|----|
| 自己意識にまつわる変化 | そのままの自分を受け止めるようになる | ありのままいることを肯定できるようになる<br>元気がないままいても許される<br>そのままの自分でいい<br>そのままを受け止める<br>自らがありのままいられる場所の重要性に気づく<br>ありのままにいるということ<br>子どもと関わることは自分を大事にすること | 4  |
|             | 自分自身と向き合えるようになる    | 自分の価値観を振り返る<br>自分を客観視する<br>自己認識の常識を疑うこと   | 2  |
|             | 自分とは違う価値観を受け止める    | 不都合な出来事に対する寛容性の獲得<br>人との違いを受け入れる心の余裕<br>受け入れられる考え方の幅が広がる  | 1  |
|             | 子どもに関わる人達への苦手意識の低減 | 子どもに関わる人達への苦手意識の低減  | 1  |

|                              |                      |  |   |
|------------------------------|----------------------|--|---|
|                              | 他者に対する自己開示ができるようになる  | 他者に対する自己開示ができるようになる  | 1 |
| 市民としての関わりにつつまつわる変化           | 楽しみながら取り組めるようになる     | 子どもに対する苦手意識の喪失<br>問題を探すのではなく同じ目線で楽しむ<br>子どもとの実践へのハードルが下がる<br>使命感を感じてやるのではなく、自分が楽しんで取り組む                      | 4 |
|                              | 子どもとの関わり方の変化         | サポートするのではなくエンパワーする<br>役割としての関わりから自分としての関わりへ<br>一方的な関わりから、子ども自身の思いを尊重した関わりへ<br>教育者という関わりからただ一緒にいるだけでいいという関わりへ | 3 |
|                              | 子どもへの関わり方のスタンスの明確化   | 子どもへのスタンスを変化させないことへの感動<br>自分のスタンスと他者のスタンスの切り分け<br>子どもに気を遣うスタンスの発見<br>べき論で関わるのではなく、無理をしない関わりへ                 | 2 |
|                              | 子ども観の変容              | 「子どもたち」から「その人」へ<br>自立していけることへの確信   | 2 |
|                              | 居場所づくりの必要性に気づく       | 居場所づくりの必要性に気づく   | 1 |
|                              | 地域の居場所づくり            | 子どもの身近にある場所でありたい   | 1 |
| 子どもや他者の言動に対する想像力や視点につつまつわる変化 | 相手の反応を意識し、想像できるようになる | 相手の反応を意識化する<br>相手の反応をそのまま受け取り跳ね返すのではなく、想像を膨らませる<br>その場での子どもの様子から関わる<br>相手がいま一番必要としていることをする                   | 3 |
|                              | 子どもとの関わり方の獲得         | 周囲のあたたかさを再認識する<br>子どもが自ら持つ力に気づく<br>行動を声で伝えることの大切さに気づく  | 3 |
|                              | リフレクション力の向上          | リフレクションの質の向上<br>リフレクション習慣の獲得   | 2 |

### ■自己意識につつまつわる変化

自己意識につつまつわる変化については、まず第一に「そのままの自分を受け止めるようになる」「自分自身と向き合えるようになる」といった自分に対しての態度が変わっていたことがわかる。他には「自分とは違う価値観を受け止める」「子どもに関わる人達への苦手意識の低減」「他者に対する自己開示ができるようになる」といった他者に対峙する自分の意識が変化していることがわかった。これらの変化は、ゼミでのワークやメンバーとの関わりの中で、自分の価値観について深く考える機会があったため、普段は意識されていなかった自分の価値観や他者の価値観が顕在化したところから引き起こされたと考えられる。またそれと同時に、メンバー同士でそれらの価値観を排除するのではなく、全ての価値観を受け止め、お互いに認め合うようなファシリテーションやワークがあったため、自分や他者への受け止めへと繋がったと考えられる。

「そのままを受け止める」の発話例

子どもたちを相手にする前に自分のことを理解していないとストレスを感じちゃう場面とか、自分の価値観を押し付けてしまったりするっていうことを学んだ場面。このままじゃいけない、自分の性格とか。このままじゃいけないって思っていた部分があったんですけど、それを受け入れられたっていうのがそのとき結構大きな収穫だった。

### ■市民としての関わりにつわる変化

市民としての関わり方については、一番多かったのが「楽しみながら取り組めるようになる」といった発話や、「子どもとの関わり方の変化」に関する内容である。プログラム開始前は、子どもとの関わりに対して支援するという意識や、支援者としての役割、使命感を感じていたが、もっと肩の力を抜いて自分のありのままに関わっていくという市民性を伴った関わりが見られた。また、子どもを導くというよりも、子どもが何を感じているか、考えているか、ということに重点をおくようになっていた。こういった関わりへとシフトしているということは、本プログラムにおける「市民性」が浸透していると考えられる。

また、関わり方についても、自分と他者が同じである必要はなく、自分として関われば良いということを実感したというような「子どもへの関わり方のスタンスの明確化」や、子どもを支援対象として見るのではなく、人として見ていく、信じていくというような「子ども観の変容」も見られた。さらに、実際の市民の活動としては、「居場所づくりの必要性に気づく」「地域の居場所づくり」を起こしたという行動の変化も見られた。

#### 役割としての関わりから自分としての関わりへの発話例

仕事だから役職として関わんなきゃいけないよなって思いが強かったんですけど。（中略）リフレクションとかをやろうと思うと、子どものことをよく見るようになるじゃないですか。そうしてくると、全然（子どもたちはそれを）求めてないなって思って。もう少し素の自分のほうが、この子たちには接しやすいというか。そっちのほうが、求められやすいのかなと思って。

### ■子どもや他者の言動に対する想像力や視点につわる変化

ゼミやリフレクションで、実際のコミュニケーション場面を丁寧に振り返ることで、「相手の反応を意識し、想像できるようになる」「子どもとの関わり方の獲得」「リフレクション力の向上」なども見られた。実際のコミュニケーションスキルなどにとどまらず、コミュニケーションにおける習慣や態度にまで広がっていた。

## その場での子どもの様子から関わるの発話例

子どもと関わる時は、ビジョン先行というか、どんな風にしてほしいかとか、過ごしてほしいかとか、それこそアセスメントのところで、背景をいろいろ考える。怒っている子がいたら、実は自分に怒ってるんじゃないくて、何か嫌なことがあったのかもしれないとか、そういった背景で、自分には知り得ないことも含めて、想像を膨らませていったりとか、簡単に言うと、何が正しい間違いとか、やるべきやるべきじゃないってことを先に提示されてる訳ではなくて、まず、向き合って、ぶつかって、それを噛み砕きながら、で、その瞬間には解決できないけど、家に帰ってあれはああいうことだったのかとか、ああすればよかったのかとか、そういう風に広がっていく向き合い方っていうのが、本当に仕事とは全然違ったかなと思ってます。

## 3.2.2. 新たに始めた取り組みと行動

| グループ    | 大カテゴリ         | 発話内容のラベル                               | 人数 |
|---------|---------------|--|----|
| プロジェクト化 | 地域の居場所づくり     | 子どもと一緒に居場所を創る<br>新しい居場所から生まれる新しい繋がり    | 1  |
|         | 今ある場所の「居場所化」  | 今ある場所を居場所として活用する<br>今ある場所から始める         | 1  |
| 発信      | 楽しさ起点の発信と巻き込み | 巻き込みのために、楽しさを発信する<br>周囲へ頼れるようになった      | 1  |
|         | 周囲へプログラムを紹介   | 友人へのプログラム説明                            | 1  |
|         | 新しい仕事の進め方を伝えた | 記録の取り方に対する考え方の違い<br>活動の様子を録画することに対する許可 | 1  |
| 実践      | 同僚の悩み相談にのる    | 同僚の悩み相談にのる                             | 1  |
|         | 仕事のやり方の見直し    | 活動記録の取り方を変更                            | 1  |

プログラムを通じて始まった新たな取り組みは、「プロジェクト化」「発信」「実践」の三つの側面から考えることができる。以下にそれぞれの概要と実際の発話内容を説明する。

## ■プロジェクト化

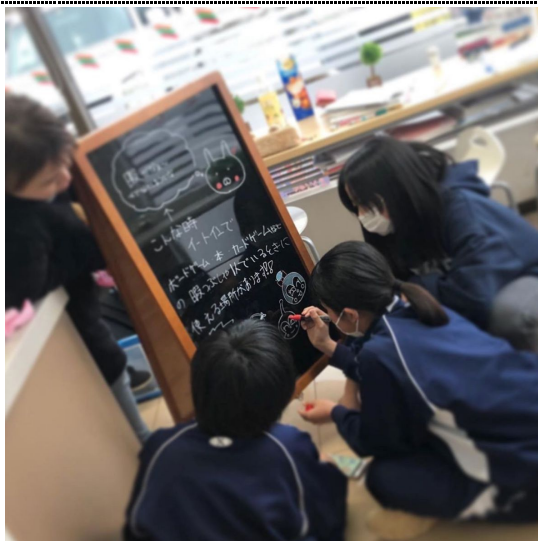
「プロジェクト化」は参加者の職場や居住地域において、自らができる範囲において始めた新たな取り組みを指す。本プログラムを通じて、一件このようなプロジェクトが新たに立ち上げられ



た。具体的には、勤務先のコンビニエンスストアで地域の子どもがいつでも立ち寄ることのできる居場所づくりがあげられ、勤務先の同僚や保護者の間に徐々に理解を広めたうえで実施された。このような取り組みは従来その地域において行われてこなかったものであり、コンビニエンスストアという既存の場所を活用して新たな取り組みを行った点に特徴がある。近隣の中学生が立ち寄り、その場で勉強をして長く時間を過ごす中で生まれる大人との交流が、以下の発話内容に描写されている。

#### 「地域の居場所づくり」の例

こんな風に、地域の皆さんへって書いて、コロナの影響で、学校一斉休校、居場所、当店の休憩所をご自由にお使いくださいってずらーっと書いて、お勉強しに来ていた子たちの写真をあげたんです、許可をとって。また、毎日来ていて、違う子が来たりとかして、3日目だったんですけど、結局お客さんとかもコーヒーとかいれたりするのに、そこ目につくから、近所の人とか、次々と褒めていくんです。偉いねとか。そうするとこの子たちも気分がいいじゃないですか。褒められるから。私は3日間で16時間勉強したとか言う子がいて（笑）合間にオセロやったりとかご飯食べたりとかもするんですけど。



#### ■発信

「発信」はこうしたプロジェクト活動をSNS等を通じて広く知らせていくことや、プログラムを通じて学んだことを日々の仕事に適用し、同僚に対して新しい取り組みの説明をすることなどを指している。オンラインとオフラインの双方を含み、自らのペースや状況に応じて。具体的にはSNSでの発信、友人に対するプログラムの紹介および職場における新たな仕事のやり方の伝達が挙げられる。

#### 「楽しさ起点の発信と巻き込み」の例

発信は、すごく気が向いたときです。自分がこうやって、楽しいなとか、もっといろんな人に関わって

もらえたらいいなって思ったときだけ発信してます。案外、僕自身、発信するのが苦手なところもあるので。ブログだとか、そういう発信し続けることが続かないんですね。すごく気が向いたときにだけ、発信するようになりました。

## ■実践

「実践」においては日々の仕事の進め方を見直すこと、またプログラムで得た理解を人間関係の構築に役立てる様子がインタビュー協力者から聞かれた。プログラムとは直接関係のない日々の状況で、プログラムで得た理解をそこに適用する点に特徴がある。

### 「仕事のやり方の見直し」の例

対子どもっていうわけじゃないんだけど、記録の取り方を私は変えて、前は文章の羅列だったんだけど、スラックにも一個挙げたけど、子どもの発言と、自分の発言と、思ったこととか考察、リフレクションみたいな形にしたの。1時間録画してて、それを文字起こしするんだけど、そうすることで、改めて見返したときに、ここがキーポイントだったんだみたいな、気づける様になった気がする。

## 3.3. まとめ

ここまでCforCプログラム自体の評価、およびプログラムが参加者に与えた影響をアンケートとインタビュー調査を通して様々な角度から見てきた。プログラム評価においては、多様性とそこから生まれる対話の中に新たな気づきがあふれていたこと、またその対話の基礎となる関係を構築することが出来た点にプログラムを評価する声が集まった。改善点としては、その関係構築をより深く、早い段階で行うことに更なる改善が見込めることが示唆され、今後の課題として浮かび上がった。

そうした学びを通じて、自己意識や市民性の獲得、およびそこから生まれたプロジェクトが具体的な成果として短期的にも見え始めた。職場であるコンビニエンスストアで子どもの居場所を作ろうとしている例や、子どもと触れ合う仕事においてその進め方の改善を行った例などは、一部であるが参加者の中に起きた本質的な変化を表していると言える。専門的な知見がないから関わらない、といった態度ではなく、自身と他者の価値観を丁寧に理解し、様々な人と協力しながら自分なりのやり方で「優しい間」を紡いでいこうとする姿勢が、このプログラムを通じて確かに、小さいながらも生み出されたと言えるだろう。

CforCプログラムを地方で実施したのは、今回が初の試みであった。より多くの子どもたちの周りに優しい間があふれるためには、より多くの地域や人々とコラボレーションしていく必要があると私たちPIECESは考えている。また、そのためには、このプログラムがより有意義なものにな

り、いろいろな人たちの心や願いと共鳴していく必要がある。今回の報告書では、丁寧に参加者の方の声をきかせていただき、プログラムがどんなものであったかを把握することを目的とした。

CforCは、まだ道半ばである。改善すべき点は改善しながら、より多くの人達と一緒につくっていけるプログラムになっていけたらと考えている。これからも、どうぞよろしくお願いいたします。

※本プログラムは、「大和証券グループ 輝く未来へ こども応援基金」の助成を受けて実施した事業です。

※本プログラムの実施にあたっては、クラウドファンディング（実施期間：2019年4月～5月、使用サイト：A-port）による支援金の一部を活用しています。

発行日：2020年4月

執筆者

小澤いぶき、青木翔子、齋典道、小山恵、大野友

団体名：認定NPO法人PIECES

住所：〒113-0033東京都文京区本郷3-40-10

三翔ビル本郷4F 小野田高砂法律事務所内 social hive HONGO

Email：info @ pieces.tokyo

設立日：2016年6月22日

Webサイト：<https://www.pieces.tokyo/>